

ルイジアナにおける墓石様式の普及パターン

著者	中川 正
雑誌名	筑波大学人文地理学研究
号	18
ページ	61-80
発行年	1994-03-25
その他のタイトル	Diffusion Patterns of Gravestone Styles in Louisiana
URL	http://hdl.handle.net/2241/00127071

ルイジアナにおける墓石様式の普及パターン

中 川 正

I 序論	IV-4 天をさす指
II 研究方法	IV-5 握手
III ルイジアナにおける墓石様式の変化	IV-6 鳩
IV 墓石様式の普及パターン	IV-7 小羊
IV-1 オベリスク	IV-8 十字架と王冠
IV-2 パルピット	V 結論
IV-3 柳	

I 序 論

本稿は、合衆国ルイジアナ州における墓石様式の普及パターンを、地域別、文化集団別、都市農村別に解明しようとするものである。

物質文化の地理的パターンの解明のためには、物質文化の型（タイプ）と様式（スタイル）の区別が不可欠である¹⁾。北アメリカの家屋研究の概念的枠組みを提示した Newton²⁾によると、型は文化集団に伝統的に引き継がれている形態的規範であり、空間的に差異を示すが、時間的には比較的永続性を持っている。これに対して様式は、専門家によって考案された流行であり、文化集団によって受容の度合いに差異があっても、基本的には空間的な差異よりも時間的な変化を顕著に示す。これらの概念を墓地景観に適用すれば、型は文化集団に特有の墓地の規模、植生、埋葬形態、フェンス、墓上構造物、装飾品、墓標などの複合的パターンを意味し、様式は商品として販売される墓石の形態に最も典型的に現れるであろう。本稿は商業的墓石様式を分析の対象とするため、その墓石の年代別普及度数を把握することも重要な課題になる。

墓地研究を行う地理学者は、伝統的に墓石を重要な景観要素のひとつとみなしてきた。1970年代前半までは、地理学的研究対象としての墓地の持つ可能性を探索する研究が主流であった。Price³⁾は、イリノイ州における214墓地の調査に基づいて、墓地景観が設立年代によって異なった形態を示すことを発見した。墓石に関しても、1840年以前には自然石をそのまま用いたものや砂岩で造られたものが卓越していたのに対して、1840年から1890年までは単純な大理石墓標が、1870年から1930年まではオベリスク墓標が、そして1900年以降、特に1930年以降花崗岩墓標が数多く出現したことを指摘した。Francaviglia⁴⁾は、オレゴン州、ミネソタ州、ウィスコンシン州のいくつかの郊外墓地において、9種類の墓石様式の年代別出現度数変化を定量的に提示することによって、合衆国における墓石景観の推移を一般化しようとした。Hannon⁵⁾は、ペンシルベニア中西部の50墓地における4種類の墓石様式の出現度数を経年的に分析した。これらの研究は、墓石様式の流行に経年的なパターンが存在することを示したが、研究対象としての墓地の価値を探索萌芽的な研究であったために、流行年代の地域的、

文化集团的差異に関する検討に欠いていた。Knight⁶⁾も指摘しているように、墓石様式の出現度数を広範囲にわたって調査した研究がないために、墓石様式は伝播の指標としてとりあげられるまでには至っていない。Jeane⁷⁾にいたっては、地理学者の研究対象は墓地の型であり、墓石様式の研究は不必要であるとさえ言い切っている。

一方、合衆国において、墓石研究の蓄積が最も大きい分野は歴史考古学である。Dethlefsen と Deetz⁸⁾は、18世紀から19世紀初期にかけてニューイングランドで流行した3種類の墓石様式の出現度数を調べ、初期に髑髏のデザイン、18世紀末には智天使のデザイン、19世紀になると壺と柳のデザインに順次移行していったパターンを発見した。これは、相対年代の推定を行ううえでそれまで暗黙の前提とされていた文化の連続性を実証する目的で行われた研究であったが、同時に墓石様式が合衆国の文化史復元のために有効な対象であるとみなされるようになり、多くの関連研究が生まれた⁹⁾。さらにDethlefsen¹⁰⁾は、研究対象を墓石のデザインばかりではなく刻印されている文字をも含め、フロリダ州アラチュア郡の4墓地の墓石を分析し、墓地が生けるコミュニティの価値観の縮図であると結論づけた。しかし、考古学の分野においても、流行年代の地域的・文化集团的・都市農村的差異に焦点を絞った研究は少ない。

本稿は、Jeane の批判以来、比較的軽視されがちになった墓石様式の研究を文化地理学に取り戻し、その研究価値を再認識させようとするものである。墓石様式の普及は、その度数においても、流行のピークの時期においても、地域や文化集団によって明瞭なパターンを示すものであり、それは文化地域のモザイク構造を持つルイジアナ州で、顕著に実証されるものと思われる。

ルイジアナは、州の北部と南部で際だった民族構成を示している。北ルイジアナに居住する大多数の人々は、スコットランド系アイルランド人の血が混じったアングロサクソン系であり、彼らのほとんどは、保守的な福音派的プロテスタントである。これに対して、南ルイジアナの住民の大多数はフランス系であり、かつローマカトリックの信者である。これに加えて、ルイジアナ州の人口の30%を占める黒人は、主にミシシッピ川やレッドリバー川流域のプランテーション地域や、ニューオーリンズやバトンルージュなどの都市に居住している。筆者は、ルイジアナにおいて系統的に抽出された墓地の実地調査をもとに、墓上構造物と装飾品¹¹⁾、墓地植生¹²⁾、墓標景観¹³⁾の南北ルイジアナ間、カトリックとプロテスタント間、白人と黒人間、都市と農村間に見られる明瞭なパターンを発見し、それらをもとに墓地型を設定した¹⁴⁾。本稿は、これらの型の景観に見られた差異を、墓石様式に適用するものである。しかし、前稿¹⁵⁾において、宗教と人種を別々に分析するよりも、両者を組み合わせた集団—カトリック、白人プロテスタント、黒人プロテスタント—がより人々のアイデンティティの対象としてふさわしいことが確認されたため、本稿ではこの新しい比較の枠組みを用いる。

Ⅱ 研究 方 法

墓石様式の定量的な分析を行う際には、実地調査によるデータ収集が不可欠である。合衆国国土地理院 (United States Geological Survey) 発行の大縮尺地形図から3,180の墓地が確認されたが、これらすべての墓地の調査は物理的に不可能であるため、実地調査を行う前に、調査墓地のサンプリング

が必要となる。サンプル墓地の抽出は、次のような基準を用いて行われた。まず、ルイジアナ州をおおむね62,500分の1の地形図から、その中心点に最も近い場所に存在する墓地が1つずつ抽出された。ルイジアナ州よりも他州にかかる面積の方が大きい地形図は、サンプルを抽出する地形図から除外された。それに加えて、分析の対象とする墓地を、1930年以前に設立され、かつ調査当時においても使用されているものでなければならないとし、最も地図の中心点に近い墓地が、この2条件を満たさないことが現地で判明した場合には、次に中心点に近い墓地を抽出し、調査することにした。この抽出法で、まず178墓地が選定された。

しかし、この方法では、サンプルに人口の多い都市や、地域に卓越する宗教の墓地が含まれていない場合が多い¹⁶⁾。この欠点を補うために、これらの墓地に加えて、それぞれの郡庁所在地から1つずつ墓地が抽出された。2つ以上の墓地が郡庁所在地に存在する場合には、その都市の性格を代表させられると思われる墓地を、設立年代や人種や宗教などの観点から判断して選択した。この方法は幾分恣意的であるが、代表的な墓地の選択にはほとんど問題がなかった。この第2の抽出法によって、58の墓地が加えられ、計236の墓地が決定した。

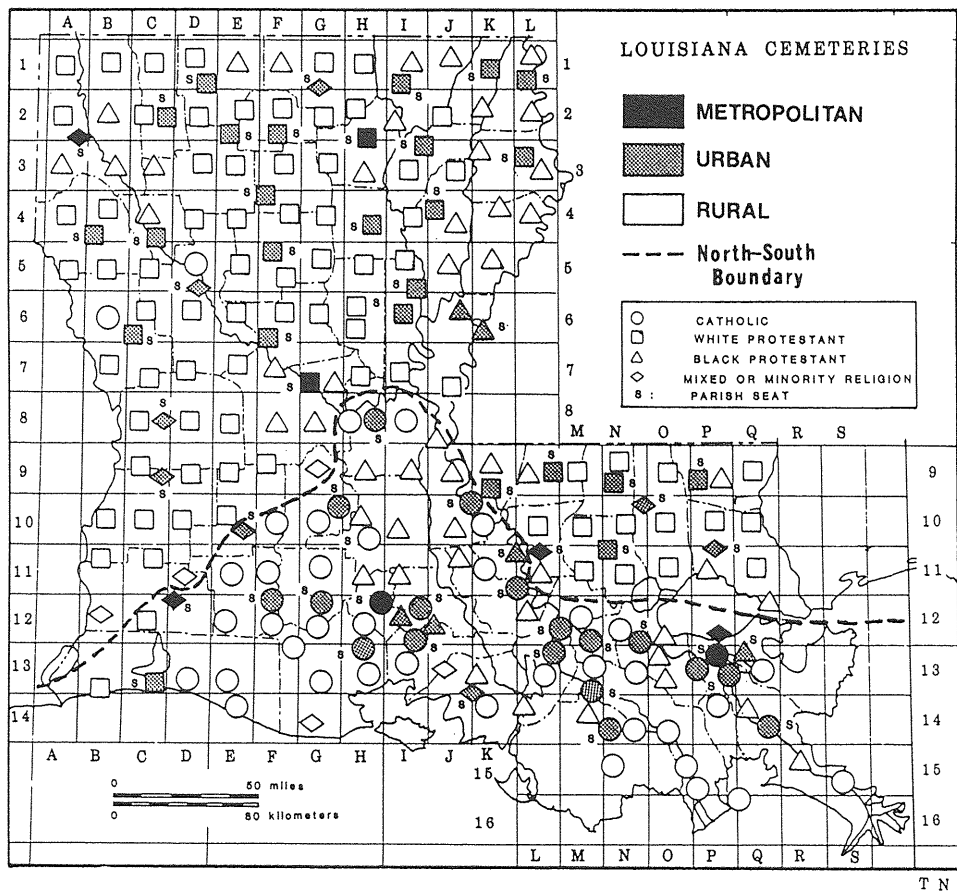
1984年12月から1985年5月にかけて筆者が行ったフィールドワークの結果明らかになったサンプル墓地の属性を、地図上に表現したものが第1図である。南北ルイジアナの区別は、従来の研究¹⁷⁾を参考に設定された境界線によって行われた。

文化集団としては、まずカトリック、プロテスタント、混成・少数宗教の3つの宗教・教派別カテゴリーに分類した。墓地を構成する人々の90%以上がカトリックである場合にはカトリック墓地、プロテスタントである場合にはプロテスタント墓地とし、他の墓地は混成・少数墓地と定義した。プロテスタント墓地の中で、黒人のみによって構成されている墓地を黒人プロテスタント墓地、他のものをすべて白人が大多数を占めるので白人プロテスタント墓地とした。カトリック墓地の中には黒人の墓を含むものもあるが、彼らは少数派にとどまっている。

都市と農村を区別する上で、都市 (metropolitan)、小都市 (urban)、農村 (rural) の3つのカテゴリーを設定した。都市墓地は、1980年国勢調査による人口5万以上の都市に立地する墓地であり、サンプル墓地の中では、ニューオーリンズ (地図上の位置12P, S13P)、バトンルージュ (11L)、シュレーブポート (S2A)、レイクチャールズ (S12D)、ラフィエット (S12H)、モンロー (S2H)、アレクサンドリア (S7G) に存在する墓地が都市墓地に相当する。小都市墓地はその他の人口1,000以上¹⁸⁾の場所にある墓地を示し、それ以外の墓地はすべて農村墓地とした。

各カテゴリーに属する墓の数を第1表に示した。サンプル墓地の中で、北ルイジアナよりも南ルイジアナが、プロテスタントよりもカトリックが、都市墓地や農村墓地よりも小都市墓地の数が多くなっているが、この差が様式の出現度数に当然反映するはずであり、分析の際に考慮に入れる必要がある。この中で、混成・少数墓地の中の墓は、民族集団間の比較の時には検討の対象とはしないこととする。

本稿では、2種類の墓石形態と、6種類の墓石モチーフを分析対象とする。筆者は、この8種類の様式の墓石に刻印されている故人の享年を、フィールドワークによってすべて記載し、その総計および地域別、文化集団別、都市農村別の集計を行った。墓石様式の年代と享年との間に1年以上の期間



第1図 サンプル墓地の属性

第1表 地域別・文化集団別・都市農村別調査対象墓数


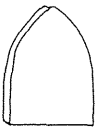
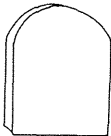
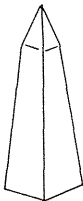

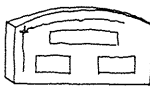
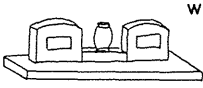
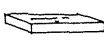
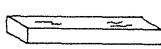
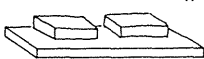
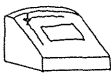
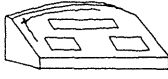
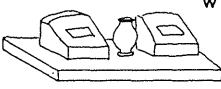
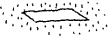
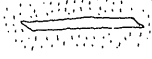
カテゴリー	墓地数	墓数
北ルイジアナ	148	61,351
南ルイジアナ	88	74,642
白人プロテスタント	104	41,382
黒人プロテスタント	57	6,545
カトリック	57	58,434
混成・少数墓地	18	29,632
都市	8	21,210
小都市	68	80,530
農村	160	34,253

があることは非常に希であることから、本稿ではその年代をもって、墓石様式の出現年代とみなした。まず、次章でこれらの墓石様式の全体的変化パターンを概略したうえで、第4章で、各々の地域別、文化集団別、都市農村別の普及パターンを検討する。

Ⅲ ルイジアナにおける墓石様式の変化

墓石様式の分析対象を決定する際に、ルイジアナにおける墓石様式の変化の概略を知る必要がある。ルイジアナ全域における筆者の实地調査によると、1880年以前には、商業的な墓石は、概して古い都市墓地のみに分布する傾向があった。当時、大多数の墓標は、自然石、木製墓標、十字架など単純な手製のものであり、商業的な大理石の墓石は、裕福な白人の墓のみに用いられていた。19世紀初期まで合衆国北部で頻繁に使用されていた粘板岩の墓石¹⁹⁾は、商業的墓石をあまり用いなかったルイジアナにはほとんど伝播しなかった。

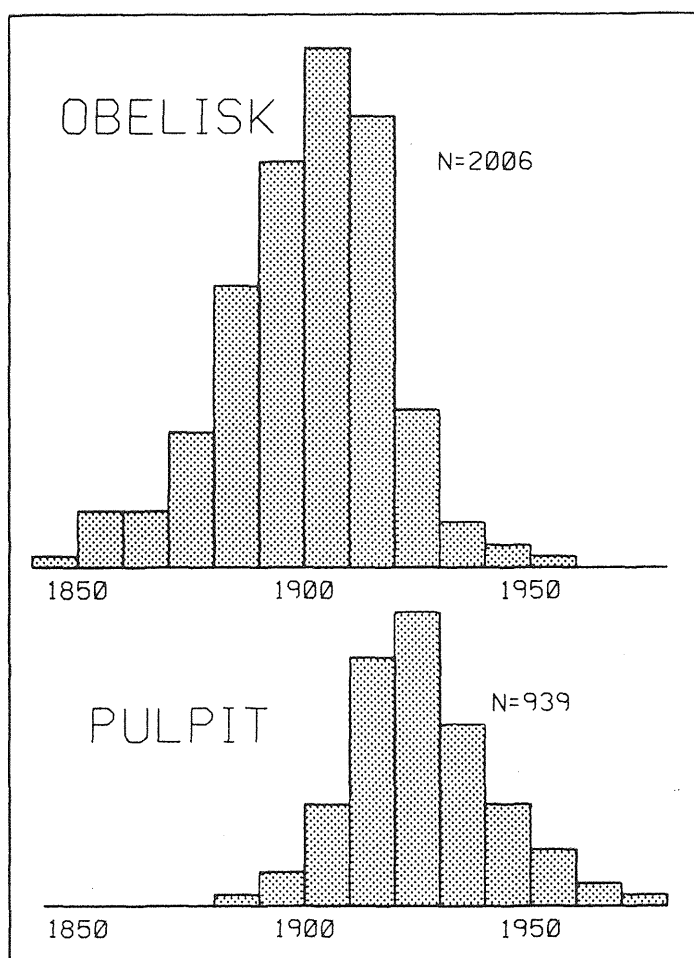
1880年から1930年にかけて、大理石の墓石が白人プロテスタント墓地を中心に普及するようになった（第2図）。最も頻繁に用いられた墓石はタブレット様式であったが、先端が尖ったゴシック様式

COMMERCIAL TOMBSTONES			
MARBLE MARKERS		- 1940	
			
PLATE	GOthic	TABLET	PULPIT
GRANITE MARKERS 1920 - PRESENT			
	SINGLE	JOINT	DOUBLE-WING
BLOCK	 w w/o	 w w/o	 w
RAISED-TOP INSCRIPTION	 w w/o	 w w/o	 w
SLANT	 w w/o	 w w/o	 w
LAWN	 w/o	 w/o	NOT AVAILABLE

TN

W: WITH BASE W/O: WITHOUT BASE

第2図 ルイジアナにおける墓石様式の変遷



第3図 オベリスクとパルピットの年次別度数

も比較的多く見られた。オベリスク様式の墓石は、南北戦争前から存在したが、19世紀後半に急激に増加し、1900年代に流行のピークに達した（第3図）。オベリスクは、以後1920年代から急速に減少した。これに対して、パルピット様式の墓石は、1880年代に出現し、1920年代に流行のピークを迎えた。この半世紀にわたる期間には、小羊や鳩や握手などのデザインがこれらの墓石に刻印されることが多かった。これらの装飾的な要素は、後期ビクトリアの建築様式の特徴と対応している。ルイジアナでは、南北戦争後の再建などの要因によって、ビクトリア様式の流行が、合衆国北部に比べて20年ほど遅れた。しかし、世紀転換期までには、富や地位を持つ人々は、合衆国北部に流行していた装飾的な墓石やデザインを用いることができるようになった。

1920年代後半には、大理石の墓石の人気は低下し、1930年代には単純な花崗岩の墓石が卓越するようになった（第2図）。花崗岩の墓石には、ブロック様式、レイズド・トップ・インスクリプション様式、スラント様式などがある。墓石のモチーフとして、花や蔦などが販売時にすでに墓石に刻印されている。1940年代後半以降、夫婦が一对となった墓石が白人の墓を中心に多くなってきている。夫

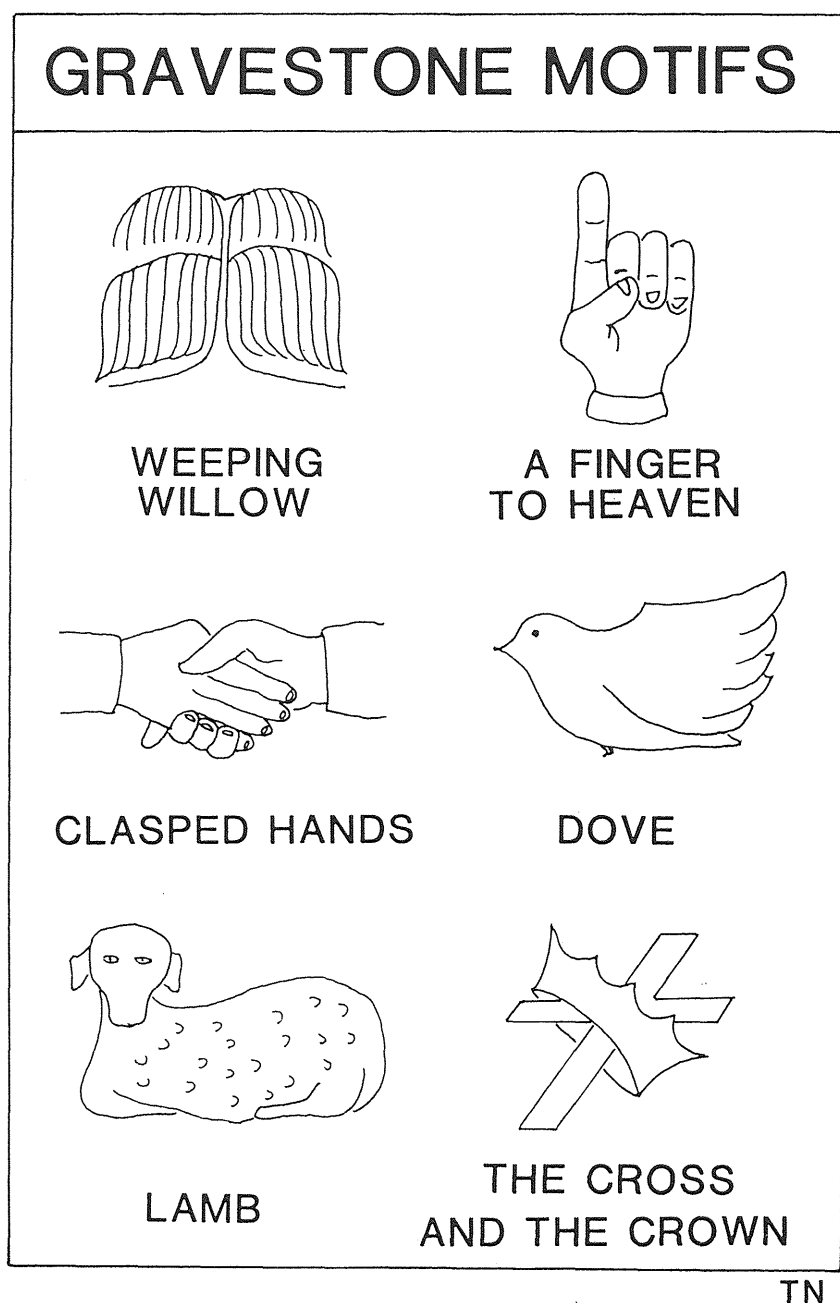
婦一对の墓石の増加は、拡大家族から核家族への社会の変化を著しているといわれている²⁰⁾。地位の表現は、もはや装飾的なモチーフや文字によって行われるのではなく、墓石購入時に、多くの付属品を加えることによって行われるようになった。顧客は墓石がシングルであるかジョイントであるかダブルウィングであるか、また台石や花立てを購入するかどうかをカタログから選択する。この大量生産された工場直送の墓石選択は、現在のアメリカ大衆文化の特徴の一つであろう。

1950年以降顕著になっている傾向は、メモリアルパーク様式の墓地の増加である。メモリアルパークは、芝刈機が障害物に遮られることなく自由に動き廻れるように、従来の伝統を離れ、平板の墓石を地表面の水準に置く形態を採っている。

1930年以降顕著になった墓石の非個性化は、アメリカ人の世俗化を反映しているのかもしれない。人々は自らの個性を生きている社会に表現するが、墓地は聖なる空間ではなく単なる死体安置のための機能的空間となった。人々の個性は、もはやキリスト教的なモチーフや墓石ではなく、より個人的な世俗的領域に表現される。1960年以降一部に普及しはじめた死者の生前の写真を飾る風習は、この世俗化の一端を反映しているものと思われる²¹⁾。

これらの墓石様式の中で、本研究の分析対象とするものは、オベリスクとパルピットである。それは、この両者が以下のような条件を満たすという理由による。まず、時代的な流行を分析する上で、ある程度以上、まとまった数が存在することが望ましい。次に、流行が始まり、ピークを迎え、次第に終息する一連のパターンを見るときに、すでに流行が終わったものを対象とする事が望ましい。

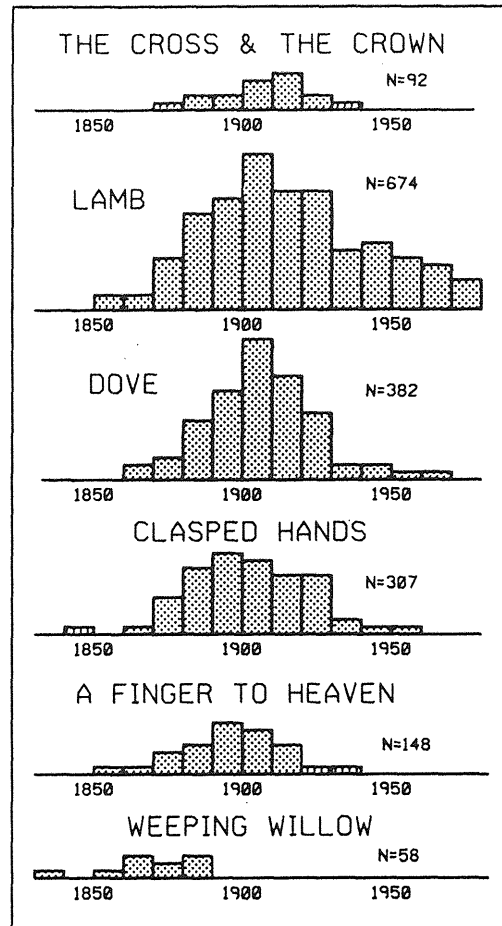
また、本研究では、同時に墓石に刻印されているモチーフも、墓石様式の一部として分析する。上記の条件を満たすモチーフとして、「柳」、「天をさす指」、「握手」、「鳩」、「小羊」、「十字架と王冠」の6種類を選択した(第4図)。これらは、それぞれ独自の普及年次を持つが、「柳」を除けば、初期に徐々に普及し、後に急激に増加しピークに達し、後に減少していく類似した普及パターンを示している(第5図)。「柳」は哀悼を示すシンボルであり、ニューイングランドでは19世紀初期から半ばにかけて普及したものであるが²²⁾、ルイジアナでは主に19世紀後半にわずかに見られるのみである。天へのあこがれを示す「天をさす指」と兄弟愛を示す「握手」のモチーフは、1890年代に普及のピークを示す。「鳩」は聖霊とキリスト者の献身を示すシンボルであるが、1900年代をピークとして、整った対称形を示すパターンである。イエスキリストまたは無実の人を示す「小羊」は、分析対象とするモチーフの中では最も度数の高いものであるが、1900年に普及のピークを示した後も、現在に至るまで比較的頻繁に用いられている。キリストの死に対する勝利を象徴している「十字架と王冠」は、1920年代に流行のピークを示す比較的新しい様式であるが、数は少ない。このモチーフは大理石墓石のみに見られるものであり、流行が本格化する前に、大恐慌とともに大理石墓石が花崗岩のものに置きかわり、自然消滅していったものと思われる。



第4図 研究対象とする墓石モチーフ

Ⅳ 墓石様式の普及パターン

本章では、上記の8種類の墓石様式の出現度数と普及年代を、地域別、文化集団別、都市農村別に検討する。

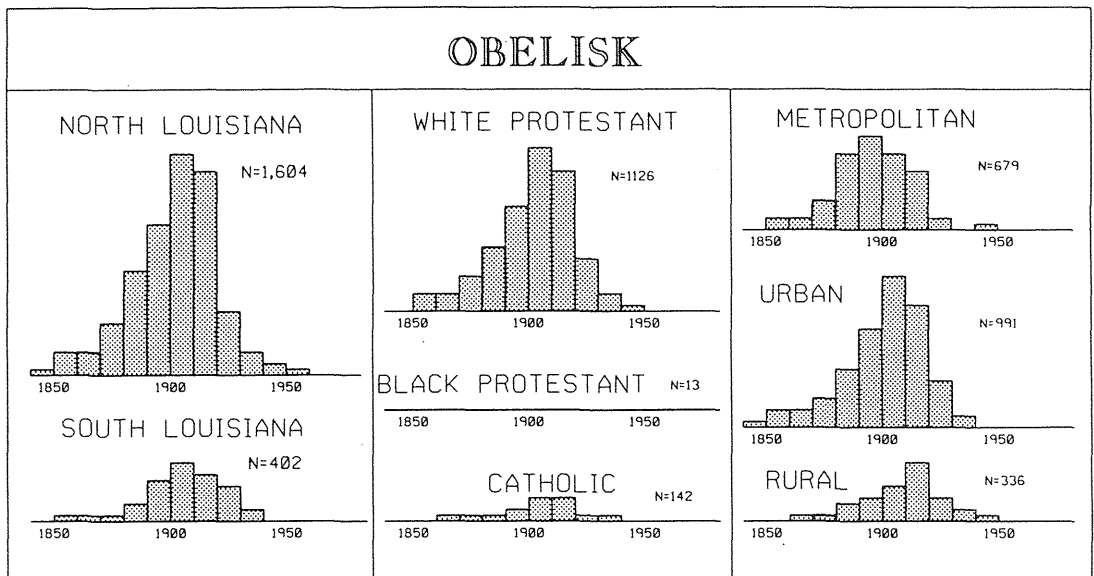


第5図 墓石モチーフの年次別度数

IV-1 オベリスク

オベリスクは、2,006事例も存在し、裕福な人々を中心として頻繁に用いられた墓石である。この様式は、南ルイジアナよりも北ルイジアナではるかに多く出現する（第6図）。南ルイジアナでは185の墓に1つの割合でオベリスクが存在するのに対して、北ルイジアナでは38に1つのオベリスク密度となっている。このことは、北ルイジアナにオベリスクが早く普及したことを意味せず、南北ルイジアナいずれにおいても、普及の度合いは1900年代をピークとする形態をとっている。すなわち、オベリスクの伝播が南ルイジアナで遅かったわけではなく、採用率が低かったのである。南ルイジアナにおいてオベリスクが少ない要因としては、同地域における地上埋葬やコンクリート棺埋葬の割合が高いことがあげられる。地上埋葬墓やコンクリート棺は、そのみで埋葬位置を示す墓標の機能を果たすために、それに加えて高価なオベリスクを置く欲求が生まれなかったものと考えられる。

文化集団別にみると、オベリスクは白人プロテスタントの墓に集中して分布する。カトリックにおける度数ははるかに少なく、調査を行った黒人プロテスタントの墓には計13存在するのみである。白人プロテスタントの36の墓が1つのオベリスクを持つのに対して、カトリックで411に1つ、黒人プ



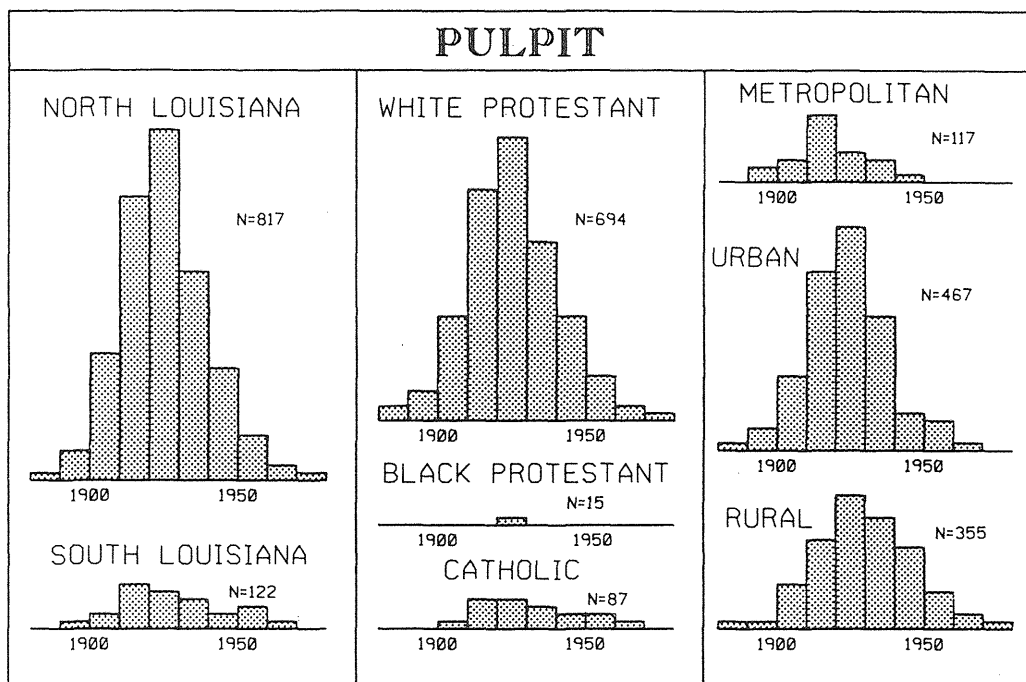
第6図 オベリスクの年次別度数

ロテスタントでは503に1つの割合にすぎない。カトリックの墓の大部分は南ルイジアナに存在し、地上埋葬墓やコンクリート棺が多いことが少ない原因の一つであろう。黒人プロテスタント墓地には、元来墓石自体が少なく、サンプルの黒人プロテスタント墓地の58%では無墓標の墓の数が墓標を持つ墓の数を上回っている²³⁾。墓石を購入するにしても、黒人が比較的高価なオベリスクを選択することは少なかったものと考えられる。

オベリスクの普及パターンの中で、最も興味深いものは都市農村間のコントラストである。度数は、都市墓地では31の墓に1つ、小都市墓地では81に1つ、農村墓地では101に1つと都市に多いことを示しているが、その普及の年代にも明瞭な差異がある。いずれの墓地においても、ピーク時を中心としてきれいな対称形を示すパターンであるが、普及のピークは都市墓地では1890年代、小都市墓地では1900年代、農村墓地では1910年代である。カタログを用いて販売する流行様式は、明らかに全国と結びつく墓石業者が存在する都市に最初に伝播し、周囲の小都市、さらには農村へ拡散する階層性の拡大伝播の形態をとる。また、都市住民が農村住民よりも新しい流行に対して受容性が高いことも、この階層性伝播形態に反映していることと思われる。

IV-2 パルピット

パルピット様式の墓石は939事例発見され、地域的には北ルイジアナに集中している(第7図)。南ルイジアナでは、611の墓に1つのパルピット様式の墓石があるのに対して、北ルイジアナでは75の墓に1つの割合で存在する。北ルイジアナでは、1920年代を普及のピークとする対称形に近いパターンを示している。これに対して、南ルイジアナでは、1910年代をピークとする形態をとっているが、相対的な数が少ないことも関与して、顕著な流行時期はみられない。



第7図 パルピットの年次別度数

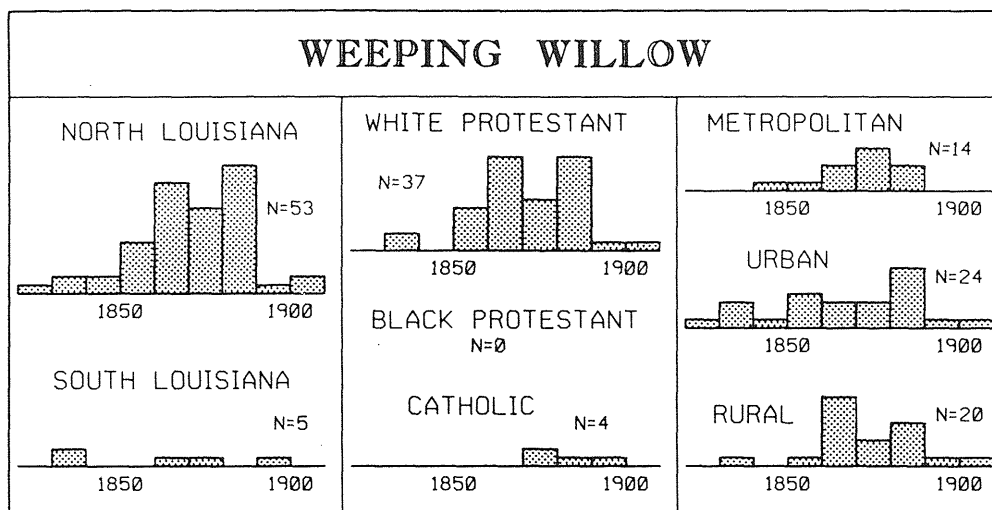
文化集団別にみると、やはり白人プロテスタントに集中する傾向が伺える。パルピット様式の墓石は、白人プロテスタント墓地では59の墓に1つの割合で存在するのに対して、黒人プロテスタント墓地では436に1、カトリック墓地では671に1の割合である。流行のパターンは、度数の高い白人プロテスタント墓地では対称形に近いものとなるが、その他はパターンがそれほど明瞭ではない。

都市農村間に、オベリスクと類似したパルピットの普及年度の差異が存在する。都市でのピークは1910年代であり、1920年代にピークを持つ小都市や農村よりも早くなっている。小都市では1900年代にはすでにかんりの普及を見せ、1930年代には流行が比較的急激に衰退しているのに対して、農村では、1910年代の普及が小都市ほどではなく、また1930年代にも農村におけるパルピットの流行の衰退は小都市ほど激しくはない。このことから、パルピットにおいても、都市から小都市へ、小都市から農村へという階層性伝播のパターンが現れているとみなすことができる。

しかし、パルピットはオベリスクとは異なり、都市よりも農村で度数が高い傾向を持つ。都市墓地ではパルピット様式の墓石が181の墓に1つの割合で存在するのに対して、小都市墓地では172に1つ、農村墓地では96に1つの割合となっている。比較的大きな都市では、多様な様式が存在するために、流行は早く訪れるが、1つの様式の度数は必ずしも高くはないことが考えられる。

IV-3 柳

「柳」のモチーフを用いた墓石は、ルイジアナで商業的墓石が比較的少なかった18世紀の流行であったこと、および調査墓地内での度数が58と少ないことなどの要因によって、上記の2様式ほど明瞭な



第8図 「柳」モチーフの年次別度数

パターンは現れていない（第8図）。しかし、大まかな傾向はある程度読みとることができる。

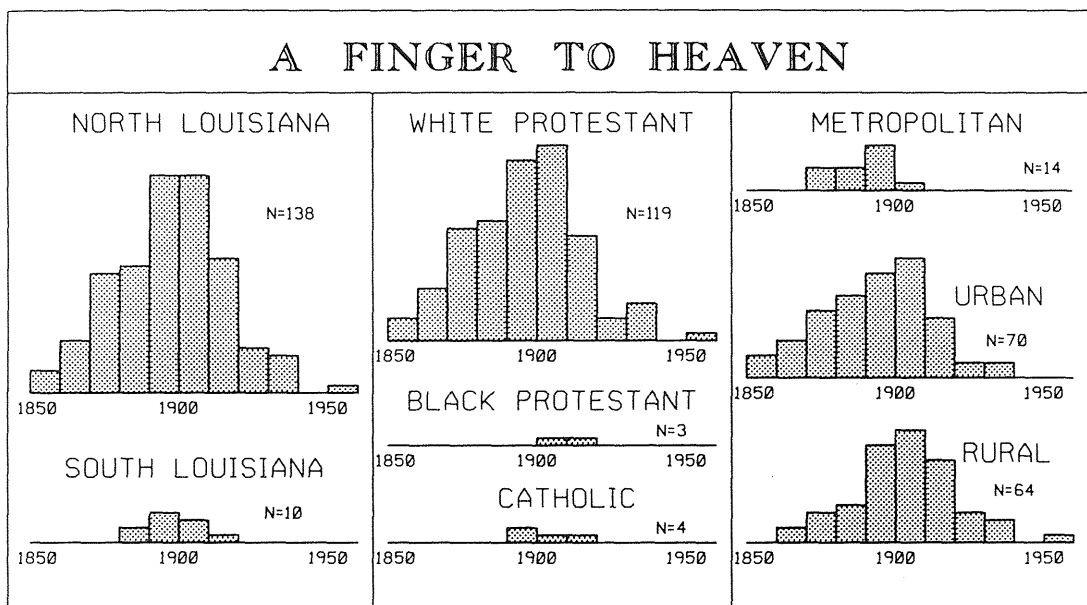
地域的には、北ルイジアナに多く、南ルイジアナには少ない。北ルイジアナでは、1860年代から1880年代に高まりがみられるが、1890年代には急激に落ち込んでいる。1890年代から後期ビクトリア様式に特徴的な多様なモチーフが出現するため、19世紀初期から全国的に普及し、南北戦争後にはすでに流行が衰えていた「柳」のモチーフは、1890年代になってようやくルイジアナでも減少したものと思われる。これに対して、「柳」のモチーフが少ない南ルイジアナでは、ほとんどパターンらしい形態は現れていない。

文化集団別にみると、白人プロテスタントに多く、カトリック墓地には4事例みられるのみであり、黒人プロテスタント墓地にいたっては1事例も存在しない。都市と農村に関しては、あまり明瞭なパターンは読み取れない。

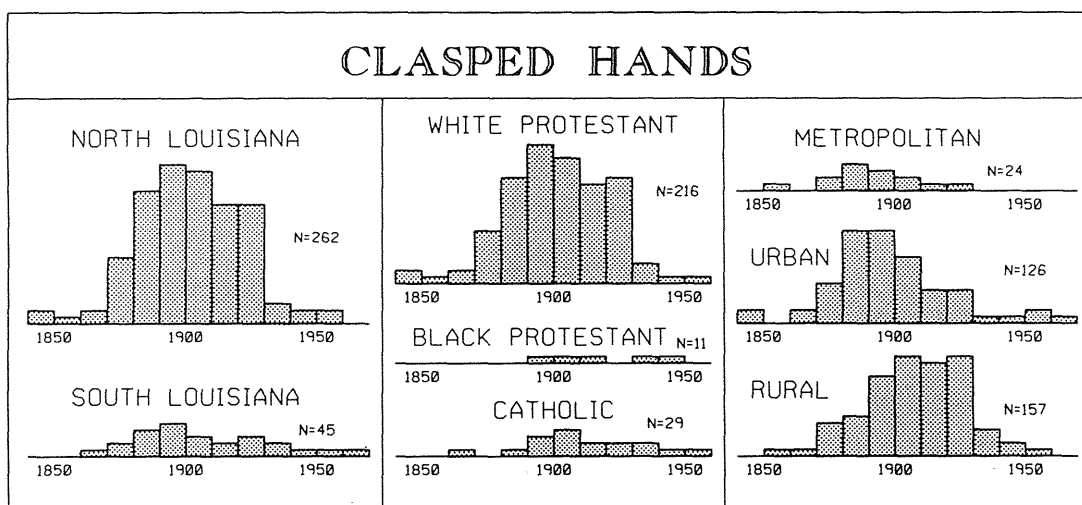
Ⅳ-4 天をさす指

「天をさす指」のモチーフは、148事例のみであるが、比較的明瞭なパターンを示す（第9図）。北ルイジアナでは、このモチーフは444の墓に1つの割合で存在するのに対して、南ルイジアナでは7,464に1つとはるかに少ない。しかし、普及のピークは、北ルイジアナでは1890年代から1900年代にかけて、南ルイジアナでは1890年代とほぼ一致している。文化集団的にも、「天をさす指」モチーフは白人プロテスタント墓地にほぼ集中しており、黒人プロテスタント墓地やカトリック墓地には少ない。

このモチーフも、都市から小都市へ、小都市から農村へという階層性の伝播パターンを持っている。都市における流行のピークは1890年代であるのに対して、小都市や農村でのピークは1900年代である。小都市と農村では、小都市の方が19世紀における普及率が高く、1910年代以降の減少率も高い。しか



第9図 「天をさす指」モチーフの年次別度数



第10図 「握手」モチーフの年次別度数

し、バルビット様式と同様、全体的な普及率は都市よりも農村の方が高く、「天をさす指」モチーフが現れる割合は、都市墓地では1,515の墓に1つ、小都市墓地では1,150の墓に1つ、農村墓地では535墓地に1つとなっている。

IV-5 握手

「握手」のモチーフは「柳」や「天をさす指」よりも多く、307事例が確認された(第10図)。この

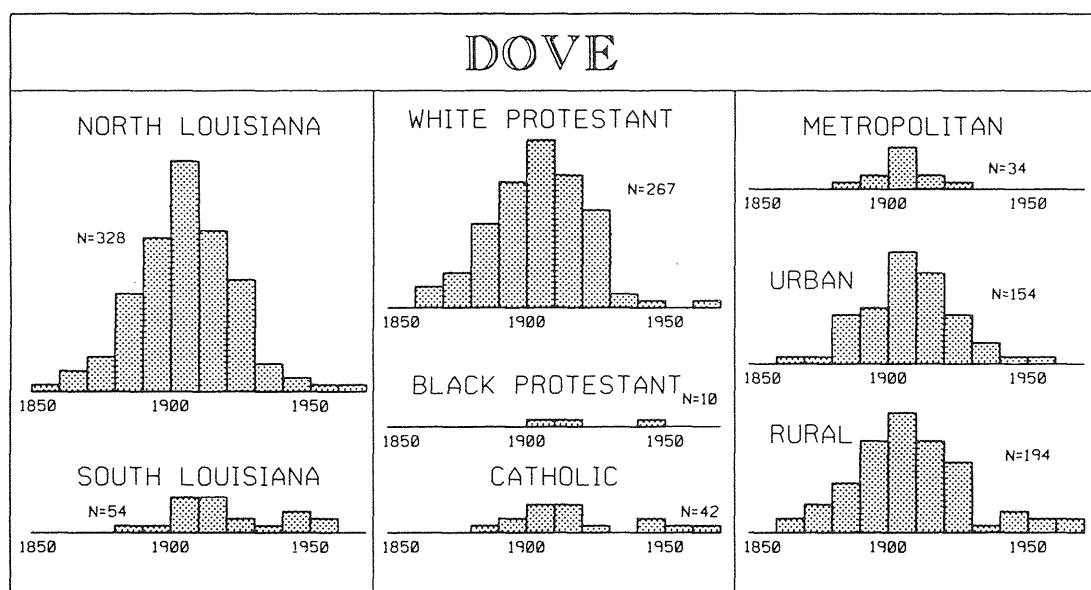
モチーフも他のものと同様、地域的には北ルイジアナに多く、1890年代をピークとした普及パターンを示す。しかし、普及率が比較的高い時期は1880年代から1920年代までと半世紀余りも継続しており、このモチーフの人氣が大理石墓石の流行が終わるまで続いたことを示している。南ルイジアナにおいても、普及のピークは1890年代であるが、その後の減少率が少ない傾向が読み取れる。文化集団間のパターンをみると、やはり白人プロテスタント墓地に最も多く出現していることが明らかである。

都市と農村間のパターンも、パルピットや「天をさす指」と類似している。まず、度数では都市よりも農村の方が高く、都市墓地では883の墓に1つの割合でこのモチーフが出現するのに対して、小都市墓地では639の墓に1つ、農村墓地では218の墓に1つの割合となっている。普及のピークは都市墓地では1880年代と最も早く、小都市墓地では1880年代から1890年代にかけて、農村墓地では1900年代から1920年代にかけて現れている。

Ⅳ-6 鳩

「鳩」のモチーフは382事例存在する。地域的には北ルイジアナ、文化集団別にみると白人プロテスタントに集中して分布し、1900年代をピークとする普及曲線を描いている（第11図）。南ルイジアナやカトリックでは、普及曲線は比較的不規則であり、1900年代から1910年代にかけてのピークの時期は存在するが、1940年以降にも数事例出現している。

都市農村間のパターンは、パルピットや「天をさす指」や「握手」と同様、農村に多く都市に少ない形態をとっている。「鳩」のモチーフが用いられる割合は、都市墓地では623の墓に1つであるのに対して、小都市墓地では522の墓に1つ、農村墓地では176の墓に1つとなっている。しかし、他のモチーフでみられた都市先行型の階層性伝播のパターンはみられず、都市、小都市、農村墓地いずれに



第11図 「鳩」モチーフの年次別度数

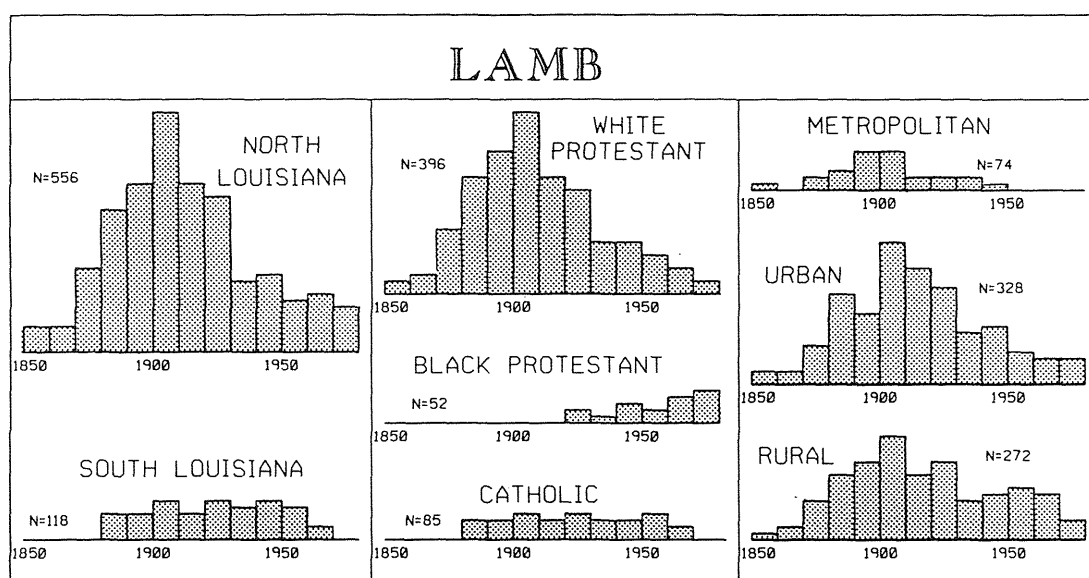
においても、1900年代をピークとする普及曲線を描いている。「鳩」はプロテスタントの信徒には非常になじみのあるシンボルであるため、都市農村にかかわらず古くから墓石に好んで用いられたモチーフであるものと思われる。

Ⅳ-7 小羊

「小羊」のモチーフは674事例も存在し、調査を行ったモチーフの中では最多である。「小羊」は神へのいけにえとしてこの世に來たイエスキリストのシンボルとして、キリスト教徒に最もなじみの深いモチーフである。また、キリストは羊である信徒を導く牧者としてこの世に來たと信じられていることから、小羊を幼少にして昇天した者を示すシンボルとして、子供のための墓石に好んで用いられている。

地域的には北ルイジアナに集中しており、南ルイジアナでは632の墓に1つの割合で存在するのに対して、北ルイジアナでは110の墓に1つの割合となっている(第12図)。普及曲線は両地域間で異なっている。「小羊」のモチーフの出現度数は、北ルイジアナでは1900年代をピークとする曲線を描き、1930年代には1920年代の半数に落ち込む。しかし、その後は大きな減少を見せず、現在でも花崗岩のカタログ化された墓石に「小羊」のデザインがしばしば現れている。これに対して南ルイジアナには、特別目だった普及のピークは見られず、1890年代から1960年代まで継続的に出現している。南ルイジアナでは、地上埋葬墓にも小羊が刻印されることがあり、それが年次的に比較的均等な度数になって現れているものと思われる。

「小羊」のモチーフは、文化集団の中では白人プロテスタントに最も多く、1900年代をピークとした典型的な普及曲線を描いている。黒人プロテスタントとカトリック墓地では、全く異なったパターン



第12図 「小羊」モチーフの年次別度数

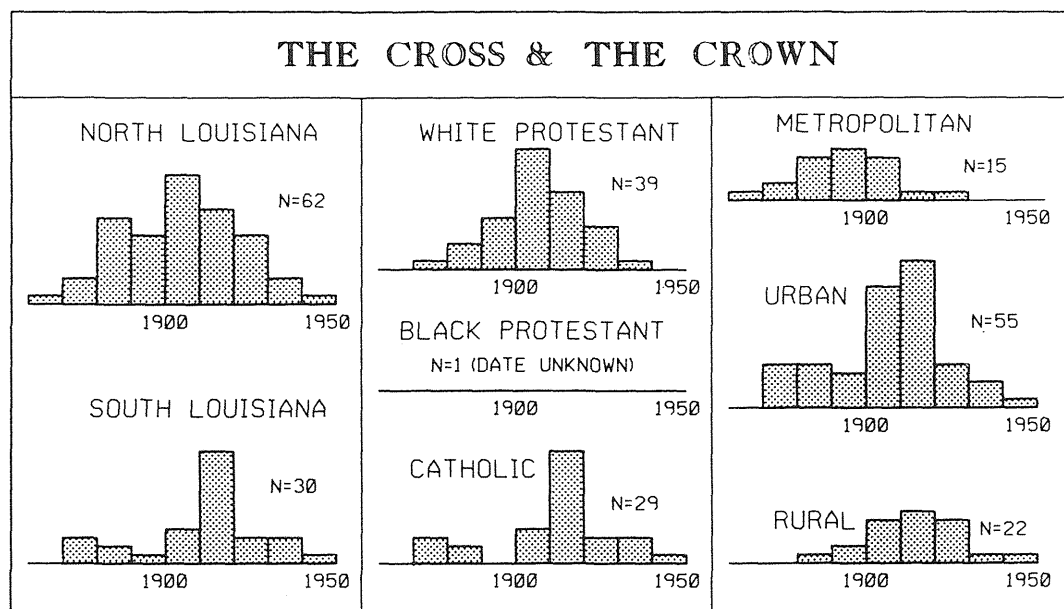
ンが現れている。カトリックでは、年次的に大差がなく、特に普及のピークもない形態となっている。黒人プロテスタント墓地では、白人プロテスタント墓地で普及曲線が下り坂となった1920年代から出現し、現在にいたるまで全体的に微増傾向にある。黒人墓地では、今世紀初頭までほとんど商業的な墓石が存在しなかったが、1920年代以降次第に増加していった。彼らは、墓石に刻印するモチーフを選択する際に、キリスト教で最もなじみの深い「小羊」を選択したものと思われる。したがって、商業的墓石の年次的な増加とともに、「小羊」モチーフも増加してきた。

「小羊」のデザインは、都市よりも農村で頻繁に用いられている。「小羊」のモチーフの出現度数は、都市墓地では286の墓に1つの割合であるのに対して、小都市墓地では245の墓に1つ、農村墓地では125の墓に1つとなっている。大衆に親しまれてきた伝統的なモチーフであるので、数多くの選択肢を持つ都市よりも農村での割合が高くなったものと考えられる。普及曲線は、都市、小都市、農村墓地それぞれに白人プロテスタント、黒人プロテスタント、カトリック墓地という異なった性格のものが含まれているため、明瞭なパターンが現れていない。

Ⅳ－8 十字架と王冠

調査対象としたモチーフの中で最も最後の1910年代に普及のピークを持つ「十字架と王冠」は、92事例しか存在しない。1930年代には大理石の墓石が余り用いられなくなったために、普及し始めたばかりの「十字架と王冠」のモチーフは、本格的な流行を招く前に、大多数の人々にとって選択肢のひとつとはならなかったものと思われる。

地域的にはやはり北ルイジアナに多く分布するが、南ルイジアナでも1910年代に一時的な高まりがある（第13図）。文化集団間でも、白人プロテスタントに多く、1900年代をピークとする普及曲線を



第13図 「十字架と王冠」モチーフの年次別度数

描いている。カトリックにおいても、比較的頻繁にみられ、1920年代をピークとしている。黒人プロテスタント墓地には1事例見られるのみである。

都市農村間には、オベリスクに似たパターンが見られる。まず、農村よりも都市に早く普及のピークが現れる階層性伝播パターンが見られる。普及のピークの時期は、都市墓地では1890年代であるのに対して、小都市墓地と農村墓地では1910年代となっている。次に、農村よりも都市に用いられる割合が高い。「十字架と王冠」のモチーフは、都市墓地では1,414の墓に1つの割合であるのに対して、小都市墓地では1,464の墓に1つ、農村墓地には1,556墓地に1つの割合となっている。都市での頻度が高い理由として、このモチーフが都市では典型的な普及曲線の初期から末期まですべてを描ききったのに対して、小都市や農村では、この流行のピークが来る前に墓石の材質が変化したために、流行が中断してしまったことが関与していると思われる。

V 結 論

本稿は、ルイジアナにおける8種類の墓石様式の出現度数および普及時期を、地域別、文化集団別、都市農村別に分析を行った。その結果、この8種類の様式に共通するパターンと、様式によって異なるパターンが存在することが明らかになった。

調査対象となったすべての様式は、地域的には北ルイジアナに集中して分布する傾向がある。南ルイジアナでは、地上埋葬墓やコンクリート棺が多く存在し、それらがすでに墓標の機能を果たしており、さらに墓標を加えるにしても、クロスやマリヤ像や聖人像が好まれる傾向がある。その地域の人々は、あえて全国的に流行しているオベリスクやパルピットなどの墓石を購入する必要性を感じなかったものと思われる。

しかし、このことは南ルイジアナにこれらの様式が遅れて伝播したことを意味するものではない。南ルイジアナにもそれらの様式は伝播しており、オベリスクや「握手」などのように、普及のピークがほぼ一致するものがあり、その他の様式も普及のピークに大きな差異はない。すなわち、南ルイジアナにこれらの様式の選択肢は伝播したが、その地域の人々は、これらの墓石様式を採用する抵抗を持っていたものと思われる。

また、文化集団別に普及パターンを検討すると、調査対象となった墓石様式は、例外なく白人プロテスタント墓地に集中して存在するが、黒人プロテスタント墓地やカトリック墓地には少ない。このことは、マイノリティが必ずしも白人プロテスタント中心の流行を採用するわけではないことを明瞭に示している。カトリックは、地上埋葬墓やコンクリート棺やクロスや像など、墓標の機能を果たす代替物を持っており、白人プロテスタントの流行を追う必要性を感じなかったものと思われる。

また、黒人プロテスタント墓地でこれらの墓石やモチーフが少なかったことには、墓石を安置すること自体少ない黒人墓地の特性が反映している。1979年において、ルイジアナ州における白人の平均年間個人所得は8,253ドルであるのに対して、黒人の所得は3,628ドルにすぎない。経済的に不利な条件を持っていた黒人は、高価な流行の墓石を購入する余裕を持たなかったことが推測される。黒人プロテスタント墓地へのこれらの様式の伝播には、経済的な障壁が存在したものと思われる。

文化集団別の年次的な普及の推移を検討すると、白人プロテスタントでは初期に緩やかに、その後ピークに至るまで急速に普及し、その後新規の採用数が減少していくという典型的な曲線を描くが、その他の集団は必ずしもこのパターンをとらない。カトリックは、数が少ないために、典型的な普及曲線が現れないものが多い。黒人プロテスタントは、流行の全国的なピーク時には墓石自体が少なく、流行が終わった時点で墓石が増加した傾向を反映して不規則な形態を示すものが多い。これらの文化集団間の差異は、「小羊」のモチーフの事例に最も顕著に現れている。白人プロテスタント墓地では、1900年代をピークとする典型的な普及曲線を描いているが、カトリック墓地では、1880年代から1960年代まで目だったピークもなく比較的均等な出現度数となっている。黒人プロテスタントにいたっては、白人プロテスタントの流行がかなり下り坂になった1930年代に出現し、1970年代まで増加傾向を示している。

都市農村間の普及パターンをみると、調査を行った8つの様式の内5つに、都市から小都市へ、小都市から農村へと普及のピーク時が移行する階層性伝播を読みとることができる。「柳」のモチーフは事例が少ないために不規則な普及形態となったものと思われ、また「鳩」や「小羊」は、キリスト教徒にとって伝統的ななじみの深いシンボルであったために、都市農村の差異が顕著ではないものと考えられる。これらのことから、専門家によって考案され、かつ人々の伝統的な意識に根ざすものではない様式は、一般的には階層性の伝播をとるものと推測される。カタログを用いて販売する流行の様式は、全国と結びつく墓石業者が存在する都市に最初に伝播し、周囲の小都市、さらには農村へと伝播した。

絶対数が少ない「柳」のモチーフを除くと、墓石様式の普及の度合いは、農村に高いものと都市に高いものに分類される。パルピット、「天をさす指」、「握手」、「鳩」、「小羊」の5つの様式は、都市よりも小都市、小都市より農村で頻度が高い。都市には農村よりも様式の選択肢が多いために、墓石形態やモチーフも多様性に富む。したがって、個々の様式の割合は必ずしも高くはない。対照的に農村では、普及の時期は遅くとも、伝播した比較的少数の様式は概して広く普及する傾向がある。

これらのモチーフとは逆に、オベリスクと「十字架と王冠」のモチーフは農村よりも都市に高い割合で分布する。オベリスクは都市にまず流行し、小都市にもかなり普及をしたが、高価であることなども関連して、農村にはそれほど普及しなかった。「十字架と王冠」のモチーフは、大理石に刻印されるモチーフとしては、1910年代に普及のピークを持つ比較的后期のものであった。そのため、都市では初期から末期まで典型的な普及曲線を描いたが、小都市や農村では、流行が本格化する前に、墓石の主体が花崗岩に転換したため、中断してしまったものと思われる。

以上のように、本稿はルイジアナの墓石様式が、地域や文化集団や都市農村によって、特徴あるパターンが存在することを示した。文化伝播には、階層効果があることや採用に対する文化的・経済的抵抗があることは、さまざまな研究によって主張されてきたが、本研究はそれを、年代を比較的明瞭に捉えることができる墓石の実地調査によって、効果的に実証することができた。墓石様式の研究は、文化伝播を定量的に把握する有効な手段であり、さまざまな伝播拡散理論をこの文化景観要素を用いて検証することが可能であろう。

注・参考文献

- 1) 中川 正 (1992) : ルイジアナ州における墓標景観. 人文地理学研究, **16**, pp.59-60.
- 2) Newton, M. B., Jr. (1987): *Louisiana: A Geographic Portrait*. Geoforesics, Baton Rouge, Louisiana, pp. 171-172.
- 3) Price, L. W. (1966): Some results and implications of a cemetery study. *Professional Geographer*, **18**, 201-207.
- 4) Francaviglia, R. V. (1971): The cemetery as an evolving cultural landscape. *Annals of the Association of American Geographers*, **61**, 501-509.
- 5) Hannon, T. J., Jr. (1973): Nineteenth century cemeteries in central-west Pennsylvania. *Proceedings of the Pioneer America Society*, **2**, 23-38.
- 6) Knight, D. B. (1973): Cemeteries as living landscape. *Ontario Genealogical Society Publication*, **73-8**, pp.18-19.
- 7) Jeane, D. G. (1972): A plea for the end of tombstone style geography. *Annals of the Association of American Geographers*, **62**, 146-148.
- 8) Dethlefsen, E. and Deetz, J. (1966) : Death heads, cherubs, and willow trees: experimental archaeology in colonial cemeteries. *American Antiquity*, **31**, 502-510.
Deetz, J. F. and Dethlefsen E. S. (1967): Death head, cherub, urn, and willow. *Natural History*, **76-3**, 28-37.
- 9) 代表的な研究には以下のものがある。
Tashjian, D. and Tashjian, A. (1974): *Memorials for Children of Change*. Wesleyan University Press, Middletown, Connecticut.
Benes, P. (1977): *The Masks of Orthodoxy*. University of Massachusetts Press, Amherst, Massachusetts.
Salter, J. A. (1987): *The Colonial Burying Grounds of Eastern Connecticut and the Men Who Made Them*. Archon Books, Hamden, Connecticut.
- 10) Dethlefsen, E. S. (1981): The cemetery and cultural change. In Gould, R. E., and Schiffer, M. B. eds., *Modern Material Culture*. Academic Press, New York, 137-159.
- 11) 中川 正 (1990) : ルイジアナ州における墓上構築物と装飾品. 人文地理学研究, **14**, 145-168.
- 12) 中川 正 (1991) : ルイジアナにおける墓地植生. 人文地理学研究, **15**, 125-144.
- 13) 前掲 1), 59-80.
- 14) Nakagawa, T. (1990): Louisiana cemeteries as cultural artifacts. *Geographical Review of Japan*, **63-B**, 139-155.
Nakagawa, T. (1994): Louisiana cemeteries: manifestations of regional and denominational identity. *Markers, Journal of the Association for Gravestone Studies*, **11**, 28-51.
- 15) 中川 正 (1993) : ルイジアナ州における墓地の分布特性—文化集団単位としての墓地—. 人文地理学研究, **17**, 49-68.
- 16) たとえば, 筆者が悉皆調査を行ったアセンション郡では, 85%の住民がカトリックであるにもかかわらず, プロテスタントの墓地の数がカトリックの墓地数の5.6倍になっている. ランダムサンプリングを行うと, この郡の大多数を占めるカトリックの墓地をサンプルに含めない可能性が高い。
中川 正 (1988) : ルイジアナ州アセンション郡における墓地形態—死の地理学序説—. 人文地理学研究, **12**, p.119.
- 17) Knipmeyer, W. B. (1956): *Settlement Succession in Eastern French Louisiana*. Unpublished Ph. D. Dissertation, Louisiana State University, Baton Rouge.
Havard, W. C., Heberle, R. and Howard, H. (1963): *The Louisiana Election of 1960*. Louisiana State University Press, Baton Rouge.
Newton, M. B., Jr. (1975): Blurring the north-south contrast. In Del Sesto, S. and Gobson, J. L. eds., *Cultures of Acadiana*. University of Southwestern Louisiana, Lafayette, 42-48.
- 18) 国勢調査では人口2,500以上の場所を都市と定義しているが, ルイジアナにおいては, 1,000人以上の場所は周囲の地域と比較して機能的にも景観的にも都市的な要素を示すために, 本稿では1,000人の基準を用いた.
- 19) Dethlefsen, E. and Jensen, K. (1977): Social commentary from the cemetery. *Natural History*, **86-6**, p.37.
- 20) 前掲 10), p.156.
- 21) 前掲 11), pp.158-160.
- 22) 前掲 8), Dethlefsen and Deetz, p. 505.
- 23) 前掲 1), pp.61-63.

Diffusion Patterns of Gravestone Styles in Louisiana

Tadashi NAKAGAWA

This study identifies contrasting diffusion patterns of gravestone styles in Louisiana between the northern and southern part of the state, among white Protestants, black Protestants, and Catholics, and among metropolitan, urban, and rural cemeteries. Eight tombstone styles or motifs were chosen for analysis: obelisk and pulpit markers and motifs of weeping willow, a finger to heaven, clasped hands, dove, lamb, and the cross and the crown.

The data of grave marker styles were collected through field survey of the cemeteries sampled from the entire state. From 3,180 cemeteries identified in the topographical quadrangles, 236 were chosen for analysis by means of a stratified sampling. From each fifteen minute map within Louisiana, the cemetery closest to the center of the map was selected. In addition to those cemeteries, one from each parish seat was chosen in order to achieve balance among metropolitan, urban, and rural cemeteries.

All gravestone styles studied are more numerous in North Louisiana than in South Louisiana. It does not mean, however, that the diffusion of these styles were late in South Louisiana; no significant differences existed in the period of popularity between these two regions. Because South Louisiana has more above-ground vaults and concrete vaults, the people there did not find the necessity to introduce expensive markers with extra cost.

Among three cultural groups, white Protestants have the most numerous grave markers with the styles of this study. Because Catholics use crosses or statues as well as above-ground vaults or concrete vaults, they did not purchase the gravestones with these styles. Black Protestant cemeteries used to be devoid of commercial markers until the beginning of this century. From the 1920s, they began to introduce simple commercial markers. Thus diffusion of the gravestone styles in black Protestant cemeteries became later than the other two groups.

Hierarchical diffusion from metropolitan to urban cemeteries and from urban to rural cemeteries can be observed in five of eight styles studied. Urban elites readily accepted contemporary fashions in earlier period. It does not mean, however, that these styles are more numerous in metropolitan cemeteries. In reality, rural cemeteries have greater number of pulpit markers and "a finger to heaven," "clasped hands," "dove," and "lamb" motifs than urban or metropolitan cemeteries, probably because urban people have more choice.